

時に翻弄されたり1

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

時に翻弄されるというのはこういうことなのだろうか。今でもそのときのことがしつこく想いだされる。

昨年10月22日のことである。その日は大型台風が列島各地に甚大な被害を与えながら接近来襲していた。その日は同時に私自身がインドネシアへの約1か月の旅を企画し、まさに決行せんとしようとした日であった。ちなみに格安航空券での旅であり、その日に飛行機が飛ばなければ変更はできず航空券そのものが無効になり、その代金も返還されないというなかでの旅立ちであった。

大阪まで風雨強かるべし悪天候のなか何とか到達、予約済みのホテルにも無事チェックインでき安堵したものの、烈風激雨は一向に収束する気配は微塵もない。

大きな不安を一方でいだきながら、他方で飛行機さえ飛んでくれたらそこは平安でとりとめもない雲上の旅が待っているのだという意望（いぼう）を抱きながら就寝する。

明朝5時にホテルをチェックアウトし、最寄りのJR駅から電車に乗車し目的駅のJR難波駅に向かったものの、乗換駅で電車を待てども来ないし、ホームには乗降者の存在すらない。これは何か異変があったなとおもい、駅員に電車の運行状況を訊ねたところ、本日は台風の影響で運行を見合わせているということであった。台風の影響のためかどうかかわからないが、駅周辺にはタクシーすらない。困り果てたというわけではないが、困窮したことに変わりはない。駅員情報では、難波駅は2キロぐらい先であるということであったので、風はおさまり、こぬか雨のなかその方向に歩き出したものの、辺りは真っ暗闇で、五里霧中の世界に紛れ込んでしまった。まさしく芥川の小説に登場するトロッコ車の良平少年の気持ち

（泣いても仕方ないと思った。泣いている場合ではないと思った。線路づたいに走り出した。）であった。さりとて、私は未熟な少年でもないし、お金も身に付けているのだ。空車のタクシーさえみつければと思いつつ聞きやすそうな人をみつけては難波駅まではどのぐらいの距離でどの方角ですかと繰り返し訊ねながら彷徨って（さまよって）いた。そうこうして大きな通りの道路に出たところ、タクシーが走っているではないか。かくして手を挙げて止まってくれればと思い、そうしたところ運良くタクシーが止まってくれた。運転手曰く、「あと数百メートルで難波オーキッドですよ。ただ、関空までは道路が通行止めになっていますよ。」などと安堵と不安をないまぜにした情報を提供してくれた。

オーキットのリムジン乗場に到着すると、あまたさぶらいける旅行者がごったがえしている。この状況を察すれば、飛行機は国際線であり、飛ぶという確信を持てたというのが正直なところである。

小生を乗せたリムジンは予定どおり動き出した。関空までは1時間あまりで到着するというのがこれまでの経験則であった。ところが1時間ぐらい走行してからのことである。件のタクシー運転手の情報があたってしまったのである。空港へ向かう車両が通行止めの規制で迂回路を走行するよう指示されているのである。迂回路は車両がごったがえしの状況であり、遅々として前へ進まない。されども時間は刻々と進む。かくして搭乗手続きに間に合うだろうか。我がところは千々に乱れ、尋常ではいられなくなる。野分（のわき）は既に過ぎ去ったのだ。この危機は必ず去るのだ。早く関空よ！どうかその姿を現してくれ、そうすれば時間は大幅に遅延しても必ず到着するとの希望がわいてくるのだ。そうこうしているうちに、リムジンは少しずつ動き出した。不安感が次第に溶解され、希望感がふつふつと湧き出してくる。遂に旅の関空のターミナルに滑り込んだ。「やっと着いたか。」自宅を出てからすでに一日の時間が経過していた。塵勞（じんろう）感と言い尽くせぬ安堵感がわが心身に不思議なコラボでへばりついていた。

搭乗手続きを終了し、当該搭乗待合室でしばし休息していると、今度は飛行機（ガルーダ）の出発時間が2時間遅れるという情報が流された。2時間遅れるということは現地の空港（デンバサル）に到着する時間も予定時刻から2時間遅れるということである。いつもなら待合室から搭乗機が運航準備をしている時間であるのに、機体すらないから時間調整しているのだろう。とりあえず、2時間遅れるとのメールを送信する。

かくして、こういう事態になったらじたばたしても仕方あるまい。絶対他力を信じようではないか。信じる者こそ救われるのだ。

（注）

意望（いぼう）： そうしたいと思ひ願うこと

野分（のわき）： 台風による暴風

塵勞（じんろう）： 俗世間における煩わしい苦勞

絶対他力： 他力本願（阿弥陀仏の本願に頼って成仏すること）